

2025年3月9日四旬節第1主日 ルカ 4: 1~13 「神を試してはならない」

私たちの神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、皆さまの上に豊かにありますように。アーメン。

今年4月20日のイースターまで、私たちは四旬節に入ります。今日はその四旬節の第1主日に当たります。そこで本日はどのようにしてこの四十日間を過ごして行くのかを、聖書のみことばの中からご一緒に聴いて行きましょう。

本日与えられました福音書の個所は、ルカによる福音書四章一節から十三節です。これは主が洗礼者ヨハネによって、ヨルダン川で洗礼を受けられた、そのすぐ後の出来事です。

ここで大切なのは、イエスさまを荒れ野に導いた霊は、洗礼の時に天から鳩のような姿で降った聖なる霊である事です。＜引き回される＞と言うと、悪しき霊の業のように思われますが、違います。聖霊がすぐにイエスさまを荒れ野に導かれます。そして荒れ野で、イエスさまは悪魔から、四十日間の誘惑を受けられます。

つまり悪魔の誘惑も、神さまによって用意された試練なのです。この四十という数にも、特別な意味があります。使徒言行録にある殉教者ステファノの説教によれば、

<40歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思い

立ちました。>7：23

そして7：30<四十年たったとき、シナイ山に近い荒れ野において、芝の燃える炎の中で、天使がモーセの前に現れました。>

7：38<この人がエジプトの地でも紅海でも、また、四十年の間、荒れ野でも、不思議な業としるしを行って人々を導きだしました。>とあります。四十年間にわたってイスラエルの人たちは荒れ野をさ迷い続けます。これは四十年の間ずっとイスラエルの人たちが、神に導かれるモーセを信頼出来ず、神を試み続けた事を意味します。

イエスさまが荒れ野に導かれ、悪魔から誘惑を受けながらそれをすべて退けられるのは、イスラエルの民がエジプトを逃れて荒れ、野で過ごした四十年間を振り返り、彼らが預言者モーセを信じず、イスラエルの民が神さまを試みた罪を、主が贖われるためです。

世の罪で最も重いものは、神さまの愛を信じず、神さまを試し続けることです。罪は、積み重ねることで大きく育ちます。神さまの愛を信じる事の出来ない人は、現実を受け入れる事が出来ません。物をどれほど手に入れても全く満足できず、より多くの力とより多く金を求めます。彼らは限りない欲望に、身を焦がします。

四旬節は、悪魔たちが行き交う現代の、荒れ野のような世界で、どのようにして私たちが生き抜いて行くか、イエスさまが直接に教えて下さる恵みの時です。

一番最初の教えは「空腹に負けてはならない。」です。人は「足りない」と感じるとパニックに陥ります。そして貪って自らの分を超えた、行いに走ります。戒めを忘れて、人の財産を奪ったり、国境を侵略して戦争を起こしたり、暴力を奮ったり、暴言を口にしたり、人権を無視して差別を行います。

そうではなく、平和の中に、等しく与えられた神さまの愛を信じて、自分に与えられた物を、貧しい人に差し出すことが、真に主を拝み、主に仕えることです。この喜びを知らずして、神さまの愛を本当に味わうことは出来ません。

悪魔の誘惑の中で最も恐ろしいものは「死への招き」です。ギャンブルもまた「死への招き」の一部です。「アルコール」や「ニコチン」など、「薬物依存」もこれと同じです。これは「死」という目的地に向かう列車に乗っている状態です。「まだ出発したばかりだ」「まだ半分も来ていないぞ」そう思っても、この列車から今すぐ降りない乗客は、必ずいつか終点に運ばれて行きます。

四旬節は一年に一度、自分を省みて、もう一度神さまに向かい、正しく方向を定める時です。そのため灰の水曜日に特別な祈りが、様々な教会で準備されます。これも大切なお祈りです。

そしてイエスさまは、悪魔と対する方法を、大変丁寧に教えてくださいます。イエスさまと悪魔たちの対話の中から、私たちも彼らとの戦いを学びましょう。まず大切なのは冷静な心です。恐れず、怒らず、悲しまず、静かに相手の言葉を

聴きます。そして相手を全面的に否定することなく、聖書の言葉を用いて、静かに対話を続けます。

結局すべてはみな、神さまのみ手の中にあります。誘惑を仕掛ける悪魔もまた、神さまのしもべに過ぎません。私たちの理解を超えた神さまの理が、この世のすべての事柄に潜んでいます。四旬節のはじまりに当たって私たちはみな、愛するイエス・キリストに従い、神の愛を信じ身を慎み、祈りの時を過ごしましょう。

人知では到底計り知る事の出来ない神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いとを守られますように。アーメン